

海軍航空整備兵

秋田県 藤原 倉吉

私は本籍地秋田県北秋田郡大館町六一二に生れました。父は藤原三太郎、母ハツ子、長男・神造、長女・チエ、次男・幸吉、三男・金一、四男の私倉吉の家族計七人でありました。家業として父は日雇い労務者で、何の仕事でもして毎日を過ごしていました。多勢の家族でしたので生活は大変でした。兄達も支那事変に参加していました。

私は昭和十七（一九四二）年徴兵検査を受けて甲種合格になり、昭和十八年三月一日に海軍に入団することになり、横須賀海軍第二海兵团の航空整備兵として入隊しました。ここで初年兵教育を受けましたが、特に厳しいというより、カッター教育は大変に辛かったです。手に豆が出来てつぶれて痛む、座った腰や尻は赤く腫れてくる、この辛さは大変なものでした。

中台湾に寄港、高雄に上陸しました。三日間ほどでまた乗船して南方に向かいました。

バシー海峡ですが、その時は敵の潜水艦を警戒しながらの船旅でした。海は荒れて大変でしたが、無事フィリピン諸島のマニラに上陸することができました。

昭和十九年十月の某日でした。その頃の戦況は極めて厳しく、敵機は来るやら、日本軍は各方面とも苦戦しているという事も聞きました。私達と同僚もほとんどが戦死したようでした。私達はなんとかほかの陸軍の方と同じに行動してはいませんが何をしてもよいか分からず、ただうろろうろしていたように思います。命令系統が私達には不明でしたので困りました。

昭和十九年十二月頃であったと思いますが、大空襲があり、大勢の戦死者が出ました。何か分かりませんが、戦傷者を担架で運んでいる中で、長官を病院船に運び込み、そのまま私はその病院船で長官の付き添いのため、内地へ帰ることとなり

いろいろ入団前に話には聞いていましたが、初年兵は何をやってもうまく出来ずに、吊り床の整頓は何回もやり直しをしてなかなか上手には出来ず、自分の不器用さには苦労しました。しかし私は教育期間中は運が良かったのか心配したほど叩かれることもなく過ごすことが出来ました。

そして一期の検閲も終わり、横須賀海軍航空隊に入隊しました。それから約二カ月間ほどは飛行機の整備の教育を受けました。霞ヶ浦航空隊に入隊してからは、約一年間霞ヶ浦で実戦訓練を受けました。その時は若い志願兵の上等兵から腕立伏せをやらされたり、尻を叩かれたり、それはそれは大変な苦労でしたが、これはすべてが訓練であり頑張りました。

昭和十九年九月に、第二十六空戦第二次鷲部隊に入隊して初めて外地に出ることになりました。同僚達は飛行機でそれぞれ出発しましたが、私は船でほかの陸軍の歩兵部隊と一緒に乗船して行きました。その時の同僚は十二人ほどでしたが、途

ました。その長官は別府の海軍病院に入院することになり、私はもう必要なくなりましたので元の隊である横須賀の海軍航空隊に復帰しました。

我々の航空隊と云ってもほとんどが出撃していた、ただ偵察機が三機ほど残っているだけでした。

昭和二十年を迎えて、毎日何をしたのか今では思い出せと云われても思い出せません。本当は戦時中のことですから申し訳なく思いますし、昭和十八年三月一日に入隊してからの二年七カ月の間、何をしていたのか自分なりに苦笑してしまいます。多くの戦友は亡くなり、外地に出てもこれと云う戦闘も出来ず、何をしていたのだろうかと思うと、自分で腹のたつ思いでいっぱいです。

いよいよ本土決戦の様相となり、米軍は沖縄を攻撃して来るし、東京空襲、大阪空襲と内地も次々にB 29の空襲にさらされ、毎日のように空襲警報発令のサイレンは鳴ります。内地防空も大変で、敵機は悠々と飛来し、次第に日本の友軍は少なくなり、とても敵機の数には及びません。でも日本

は負けるとは思わず最後まで頑張らなくてはならないと思っていました。当時は女も子供も最後の一人になっても頑張ろうという気概を国民は思っていたがどうすることも出来ず、八月十五日を迎え天皇陛下の玉音を聞き終戦を迎えました。

我々も残務整理を済まして、何も持たずに帰郷することになりました。復員しても帰って見れば父は亡く、家族は皆元氣ですがどうすることも出来ず、しばらく考えてみたのですが、近くで働く場所を見つけることも、思うような仕事もなく苦労しました。しかし何とか一生懸命働きました。家族も皆健康で今まで来ました。

戦時中から戦後を振り返って見ますと、多くの戦友の戦死された家族は、どんなにか苦労されたと思います。戦争はしてはならない、どんなにしっかりと戦争ほどみじめなものはありません。

戦後六十年の節目という時に、元軍人軍属短期在職者協力協会の皆様と共に、永遠の平和を願い、八十三歳の余生もまた幾許いほくもない身ではありません

私の予科練、伏竜隊の思い出

滋賀県 川合逸夫

思えば戦後六十一年、戦争を知らない世代が七〇パーセントを越え、平和の有り難さが薄れ、この豊かさが当たり前と思われる今日、その陰に尊い失われた多くの命があることを忘れてはならない。悲惨な戦争が二度とないことを願って私の体験を申し上げます。

私は昭和二（一九二七）年二月に生まれました。入隊時の家族の状況は母一人、子供四人で父は死亡、母・はまよの元に兄・真澄は銀行勤務で応召中、私逸夫、それに妹の田鶴子は女学生で学徒動員、弟の琢はまだ小学生でした。私は木曾川西小学校から県立一宮商業学校（農業、工業、商業の三学級）に入學しました。

当時、戦況はますます我が国には非になり、一億総動員体制となり、本土決戦の様相が色濃くな

が、私の心からの平和の祈念の心を申し上げて戦争体験を語らせていただきました。
二度と戦争はしてはならない、平和な世界が続きますようにと祈るのみです。

つてきた時代であります。私が三年生で、来年の昭和十九年三月卒業のところ、繰り上げ卒業となり、昭和十八年十二月に卒業となりました。そして、直ぐ軍需工場に就職させられました。三年生だった私も海軍の艦爆機「彗星」製造工場の愛知航空に就職しました。妹の女学校も軍需工場に動員されて、とても勉強どころでは無かったです。

愛知航空に九カ月勤務しましたが、当時は御国のために一命を捧げることが大義であり、「七つ釘は桜に锚」と「首に白絹のマフラー」の赤い血潮の予科練は、若い青少年たちの憧れの的でした。我も我もと志願したものです。

私も昭和十九年七月、予科練の試験を見事合格、九月四日、岐阜垂井の美濃一宮南宮神社で武運長久のお守札を頂き、滋賀県大津市滋賀里の予科練、滋賀海軍航空隊に入隊しました。ここで昭和十九年九月から二十年三月までの六カ月間の基礎訓練を受けました。